



優遇ではなく 平等

武田砂鉄 (ライター)

185センチもある大男、しかも、愛想がいいわけではない自分。実際には、小心者というか、常に選択に迷っている人間ではあるのだが、初見の人からすると怖そうというか、「ちゃんと対応しておかなければならない人」に見えるらしく、いきなりぶっきら棒な対応をされることはほとんどない。だからこそ、隣にいる人にぶっきら棒な対応をしているのを発見すると、「そうか、そういう人なのか」とわかってしまう。

185センチの大男に対する対応と、150センチの女性とで対応をハッキリ変える人がいる。こちらには過剰な敬語を使い、女性にはタメ口で話しかける。何を聞くにも自分が先で、女性が後になる。妻と歩いていると、常に自分が優先される。腕を組んで歩いているわけでもないし、互いに結婚指輪もし

ていない。格好もバラバラだ。それでも、大きな男と小さな女が歩いていると、社会は、人は、大きな男に合わせてくる。

大男は優先されすぎている。これではいけない。その時に、「やっぱり、小さな女が優先されるようであればいけない」と考えているわけではない。フェミニズムの話をすると、すぐに「男だって大変だ」「女が優遇されすぎて逆差別だ」との声が膨れあがる。そんな声をあげる人は、「平等」という文字を見て「ゆうぐう」と読むのだろうか。平等は優遇を作ることではない。男と女で争わせて、既に優位な位置にある男がその居場所を守る、あるいは女が奪い取る、フェミニズムはそんな戦いを望んでいるわけではない。

フェミニズムについて考えてこなかった男性たち、あるいは、できればまだ考えたくない男性たちは、この考え方が自分たちのフィールドに入り込んでくると、価値観がひっくり返ってしまうと思っているらしい。自由気ままにできなくなると怖がっているらしい。確かに、話を聞くとすぐに「なんでもかんでもダメと言われたり、気をつけなきゃいけないかったりもう大変……」みたいな愚痴が出てくる。ちっともそんな段階がないのに、あれこれ大変ですよ、という表情を浮かべる。自分たちの言動を制限する厄介なムーブメントだと捉えている。しかも、それだけで終わる。つまり、改善には付き合わずに、防御だけする。

以前、『マチズモを削り取れ』と題した本を書き、社会のどのような場面に男性優位主義が残っているのか、あちこち取材しながら一冊にした。すると、その反応として見かけたのが「女の味方をしている本」といった感想で、あたかも陣地争いをしている敵の陣営に寝返ったかのように受け止められていた。そうではなくて、荒れている土壌を整えて、それぞれが暮らしやすくするためにはどう

したらいいのかを考えたのだが、男性が優位な状態を見直そうとすると、すぐに敵認定されてしまう。

徐々に変わってきてはいる。「あちらばかり優先させるな」ではなく、「平等に暮らせるようにしましょう」、こっちだ。さすがに認識は変わってきた。これから、フェミニズムが長年問い続けてきた議題を踏んづけないために必要なのは、男性が「自分たちの存在がおびやかされている」と考えないようにすること。そのための働きかけではないのだ。正直、いつまでその説明が必要なんだよと思うけれど、説明しないと拗ねたりするので説明を繰り返す。優遇ではなく平等をめざしているのだ。

武田砂鉄

東京都生まれ。出版社勤務を経て、2014年よりライターに。2015年『紋切型社会』（新潮文庫）でBunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。著書に『日本の気配』（ちくま文庫）、『マチズモを削り取れ』（集英社文庫）、『べつに怒ってない』（筑摩書房）、『父ではありませんが 第三者として考える』（集英社）、『テレビ磁石』（光文社）などがある。週刊誌、文芸誌、ファッション誌、ウェブメディアなど、さまざまな媒体で連載を執筆するほか、近年はラジオパーソナリティとしても活動の幅を広げている。